舞麗辞
表紙／しおん
ボクっ娘勇者
ファムの敗北
試し読み版
二次元ぷち文庫
2D PETIT POCKET NOVELS

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『ボクっ娘勇者ファムの敗北』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

ボクっ娘勇者
ファムの敗北
舞麗辞
表紙／しおん
二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

ファム

長い旅の末、魔王のもとへ辿りついた女勇者。小さい胸をコンプレックスに感じている。

ゴルゴア

かつて大神官だったが、悪魔と契約して魔王になった。

ルビー

ゴルゴアに召喚された、銀髪に紅い瞳のサキュバス。

サファイア

ゴルゴアに召喚された、ブロンドに碧眼のサキュバス。

「やっと…やっとここまで来たぞ。お前が魔王ゴルゴアだな！」
扉が開け放たれるや否や、若々しい叫び声が大広間中にこだました。
声を上げたのはまだ年若い一人の剣士だ。淡いブルーのシャツに群青色のライトアーマーを纏い、背中には身の丈ほどもある大剣を背負っている。
身長はさほど高くない。身体つきも剣士にしては少々華奢で、袖から覗く細い腕もまた滑らかな陶磁のような乳白色をしていた。
頭には紅い宝玉をはめ込んだ金色の冠を被り、髪は栗毛のショートヘア。大きめの瞳の色は明るめのブラウンで、整った卵形の相貌は中性的。林檎のように色づいた頬の艶やかさも相まって、非常に清潔感のある顔立ちだった。
口元は若干大きめで、歯並びは美しい。笑顔など見せようものならきっと屈託のない、人懐っこい笑みを浮かべるだろう。
しかしその薄い唇は今、魔王と対峙している緊張によって硬く結ばれていた。
「なにものだ」
甲高い剣士の声とは対照的な、掠れた老人の声が応じる。
言葉を発したのは広間の最奥に設えられた玉座からであった。
そこに腰掛けているのは齢既に六十を超えているだろうと思しき、小柄な老人だった。
しかし無論、ただの翁ではない。

――魔王ゴルゴア。

かつては聖王国の大神官をつとめていたものの神に背いて悪魔と契約し、今は魔物を率いて大陸中を恐怖と混乱に陥れている外道である。

「ボクの名前はファム。魔王軍に虐げられている大陸中の人々を救うため、お前を討ちにやってきた人間だ!!」

剣士は玉座に腰掛ける老人を鋭い視線で射抜きながら名乗りを上げる。その名を耳にした途端、玉座の主がピクン、と片眉を跳ねさせた。

「ファム……ふむ、最近我が軍勢に盾突いているというあの〝勇者ファム〟か。たかが人間風情が、よもやこの世界の果てまでたどり着くとはな……まずは褒めてやろうではないか」

豪奢な法衣を纏った老人は感心したように頷き、眼下の勇者を見下ろす瞳をうっすらと細めた。

「いつまでもそんな余裕が続くと思うな！　ボクが来たからには、お前の野望も今日までだ!!」

余裕の表情を消さない魔王に気圧されまいと、ファムがいっそう力強い声で吼える。

しかし対するゴルゴアはキャンキャンと吼える子犬を見るような気安さで、口元に笑みさえ浮かべてみせた。

「ふ、若造め威勢がいいな。剣術も魔術も人間にしてはそれなりのようじゃが……その程度でこのワシの相手をしようとは笑わせるわ!!」

ゴウッ!!

魔王が気を吐いた瞬間、彼を中心として突風が吹いた。広間の空気が電気でも帯びたかのようにビリビリと震え出す。

「くっ……気合だけで、こんな力が……!!」

腕をかざしどうにかその場に踏みとどまりながら、勇者は驚愕交じりの声を漏らす。

「ふ、恐れ入ったか。おぬし程度あしらうのは造作もないこと……しかし同時に、殺すには惜しいのも事実。どうだファムとやら。このワシの片腕となる気はないか？　さすればこの世界の半分を、貴様に分け与えてやろうではないか」

言いながら、魔王がパチンと指を鳴らす。途端に背後で気配が生まれた。

「!?　き、君たちは……？」

ファムが振り向けば、そこには二人の女が立っていた。一人はブロンド、もう一人は銀髪。双子なのか非常に似通った顔立ちをしていたが、どちらもはっと息を呑むような美人であった。

しかも女たちはその肢体に申し訳程度の薄いヴェールを羽織っただけの格好だ。薄紫の布地越しに、乳輪の紅と股間の茂みが透け見えて、ファムは思わず頬を赤らめ目をそらす。

「美しい女どもであろう……ワシと手を組めば世界中の美女がおぬしのものになる。どうじゃ、男冥利に尽きるであろうが？」

女たちは左右から勇者の腕に身を寄せ、体重を預けるようにしてしなだれかかる。

豊満な胸の谷間に二の腕が飲み込まれ、温かな体温と甘ったるい女の匂いがファムを包み込んだ。

魔王の甘言、美女の誘惑。なるほどゴルゴアの言葉通り、それは男にとって抗いがたいものかもしれなかった。

だが、ファムにとってそれは……とんだ見当違いでしかない。

なぜなら。

「男冥利、だとぉ……ふざけるなぁっ！　ボクは、ボクは――――――ボクは女だぁっ!!」

堪りかねて発せられた勇者の叫びに、玉座の間が一瞬静まり返る。

「お、おんな……？」

さすがの魔王も面喰らったらしく、間の抜けた声でそう呟いたまましばし絶句してしまった。

そう。男のなりをしてはいるものの、ファムはれっきとした少女であったのだ。

「……く、くく……あーっはっはっは!!」

少女勇者の明かした本性に驚愕していた魔王だったが、気を取り直した彼は一転して広

間中に響くほどの高笑いを上げた。
「なるほどなるほど…これは失礼！　確かに。よくよく見ればおぬし、なかなかの美形じゃな。そんななりをしているからわからぬが、磨けば光るという奴じゃ」
少女勇者をまじまじと見つめながら、魔王は一人で幾度も頷く。
「ううっ、よけいなお世話だこの馬鹿ぁっ!!」
さっぱりとした短髪と凛々しい太眉、そこにもってきての男装のせいで、旅の途中も幾度となく少年に間違えられてきたファムではある。
しかしここまで馬鹿にされたのは初めてだ。嘲りにしか聞こえない魔王の褒め言葉に、少女勇者は太眉をキリキリ逆立て吼え立てた。
「そう怒るな……しかしファムとやら、ワシはおぬしが気に入ったぞ。どうじゃ、我が妃となる気はないか？　さすれば世界の半分などとケチなことは言わん。二人で世界のすべてを手中に収めようではないか」
そう言ってなおもニヤつく魔老の瞳に、にわかに情欲の色が滲む。
本気か、はたまた冗談か。いずれにしても魔王の持ちかけた取引は、少女勇者の神経を逆撫でしたに過ぎなかった。
「ふざけるのもいいかげんにしろ――誰がお前みたいな外道になんか!!」
吐き棄てるように叫びながら、少女は問答無用とばかりに背中に携えた剣を抜く。

シュンッ‼

鍛錬の成果であろうか、抜き放たれた剣は彼女の背丈ほどもあったにもかかわらずファムは身じろぎ一つしない。

少女がかざす刀身にはまるで模様のように微細な古代文字がぎっしりと刻まれており、外気に触れた瞬間それがまるで血を滲ませたように紅い光を孕んだ。

「ほう！　もしやそれは焔の剣か？」

勇者が向けた刃を見て、ゴルゴアが興味深げに尋ねる。

「そうだ。遥か昔神々の時代、絶対神に仕えるワルキューレが反逆神を屠ったと伝えられる聖剣だ。ボクはこれでお前を――討つッ‼」

紅い切っ先を魔王に向けて、ファムは凛とした声で言い放つ。その瞳に宿るのは揺らぐことのない正義の光だ。

「ふぅむ。どうしてもワシとやりあう気か……ならば、仕方がないな」

本当に残念そうにそう呟くや、魔老がスッと立ち上がる。

ドウッ‼

老人が床に足をつけただけで、凄まじい瘴気が部屋中を駆け巡る。まるで重力が二倍に

も三倍にもなったかのような衝撃が勇者を襲った。
「くっ、君たちは下がっていて……」
魔王が臨戦態勢に入ったと見て取ったファムは、とっさに女たちを匿おうと腕を広げる。
しかしどういうわけか、女たちは抱きついた腕を放さず、それどころか更に引っ張るようにして絡みついてきた。
「えっ、なにして……んぶぅっ⁉」
困惑し振り返ったファムだったが、少女は次の瞬間更なる衝撃に襲われる。
あろうことか、腕に絡んだ銀髪女が唐突に唇を重ねてきたのだ。
「んっ、んむぅっ…むうぅぅ――――っっ⁉」
柔らかな舌が入り込んで口腔を撫で、熱い唾液が喉奥へと流し込まれる。無理やり嚥下させられる甘い女の匂いに、同性にもかかわらずファムは頭がジンと疼くような恍惚に襲われた。
二度三度と唾液を飲み下させられてから、ようやく女が唇を離した。ねっとりとした互いの唾液が二つの唇の間で銀の糸を引く。
「ぷはっ……なにをいきなり…さ、さては君たち魔王に操られて……」
突然の奇行に催眠洗脳を疑うも、
「あ～ら、シンガイねぇ。アタシそんなんじゃないわよぉ」

ぷにっとした丸みを帯び白く柔らかそうな恥丘、そこをけなげに護ろうとしているうっすらとした綿毛のような草むら。厠や水浴びの際に見慣れているはずのそこにはしかし、所有者であるファムの見知らぬものが一つ勝手に付け加えられていた。

「これっ、これって…おっ、おっおおお……」

思わず吃音のように言葉に詰まる。

無理もない。

彼女の股間にはソーセージのような肉の塊がぶら下がっていたのだ。

「そうよオチンチンよ。男の子になりたいー、っていうファムちゃんの長年の願いを叶えてあげたの。……にしても。けっこーえげつないのが生えちゃったわね」

サファイアの言う通り、ファムの股間にそそり立つ一物は並の男かそれ以上、反り返る先端は端正な臍の辺りにまで届いていた。

「うふ、そのかわいー顔に逞しいオチンチンついてたら世界中の美少年好きが寄ってきちゃいそうだわ」

「でもその前に元のまな板おっぱいに戻さないとォ…あーでもこーいうの、逆にマニア受けするかしら？」

淫魔たちは冗談めかして笑いあうが、当のファムは気が気ではない。

「そ、そんなぁぁ……こ、これじゃボク、ボク……もぉお嫁にいけなくなっちゃうよぉぉ

えっちノベル 試し読み ここから スタート!

おっっ‼」

あまりにもむごい仕打ちに、少女はとうとう耐えきれずわんわんと声を上げて泣き始めてしまう。

「あーあ泣いちゃった。ふふっ、にしてもアナタ……男の子になりたかったくせにお嫁にも行きたかったの？　まったく欲張りな勇者さんねぇ」

「ふふ、そんなに心配しなくったってこの魔法は一過性のもの、時間が経てば跡形もなく消えて元の女の子に戻れるわ」

なじるように哂うルビーと諭すように微笑むサファイア。碧眼淫魔の言葉に、ファムの表情がほんの少し明るさを取り戻す。

「ふぇぐっ…ほ、ほんとっ？」

淫魔が告げる慰めに、相手がおぞましい悪魔であるのも忘れて聞き返す。

「ほんとほんと。だからァ、今は安心してオトコノコ楽しみましょ♪」

ぎゅむっ！

「きゃひいぃぃんっっ⁉」

ブロンドの淫魔が肉茎を掴んだ瞬間、電流が下腹部を突き抜け黄色い悲鳴が喉を突いた。

「ンふ、生え立てだからとってもビンカンなのね。ほぉらこんなのはどう？」

相変わらずうぶな反応を見せるファムに気をよくしたサファイアは、ツツゥッ、と透明

な唾液を女勇者の偽根へと垂らす。
「ふぁっ⁉　くぁっ…んひぃっ、あつぅっ⁉」
垂らされた粘液は触れたそばからじゅわりと音を立てそうなほど熱く、更に山芋にかぶれたような疼痛を植えつける。
「さっきも言ったけどアタシたちの唾は媚薬そのもの……これをぉっ、こぉやって擦り込んでぇぇっ♪」
ぬりゅぅっ、ぬるっ、にゅるっ、にゅるるるぅぅぅぅっっっ。
「はぁぅっ…ぅあはっ……や、やめぇっ⁉」
わずか数度の往復で、偽りのペニスは天を突かんばかりにいきり立ち、なおもズキズキと疼きつつ膨張を繰り返そうと硬く大きく屹立する。
「すごぉい、オチンチンそんなにビクビクいわせちゃって。でもまだまだ序の口よ」
んあっ、と口を開くや、姦淫の魔女は李のような亀頭をぱくっと丸呑みしてしまう。
「きゃひいいいいいんんっっっ⁉」
咥えられたそばから、少女勇者は悲鳴を迸らせていた。
存在しないはずの器官から伝わる蕩けそうな熱気とドロリとしたぬめり。ぐにぐにと柔らかな舌はちょうど陰茎の裏筋にぴったりとはりつき、ほんの少し蠢いただけで腰を砕かんばかりの快感電流を送り込んでくる。

「どう、サキュバスのお口は？　とぉっても熱くて、ぬめぬめぇ～ってしてて。おチンポ蕩けちゃいそうなほどキモチイイでしょ？」

ペニスを咥えながら、碧眼の淫魔は器用に言葉を紡ぐ。

「いひいぃっっ、いいわけっ、いいわけにゃいだろぉぉぁぁっっ!!」

胸だけならまだしも、勝手に生やされた男性器でまで黒い快感を貪るわけにはいかない。肉悦を認めまいと強がるファムであったが、その言葉はろれつが回らず却って彼女の味わっている牡快楽の凄まじさを証明してしまう結果となった。

「んふ、やせ我慢してるの丸分かりよぉっ？　そんなにおチンポ気持ちいいんだ♪　だったらもぉっとよくしてあげるわぁ……はむっ、あむっ、んちゅぅっ……」

ファムの本音を言い当てながら、淫魔はちゅぱちゅぱと飴玉のように亀頭をしゃぶる。

「ちがうぅっ、よくなんかっ…気持ちよくなんかぁぁっ……」

必死に否定の言葉を返すものの、その実腰はうずうずと疼いてたまらない。まるで腰骨が飴に挿げ替えられ、それを弱火で炙られているみたいだ。ちょっとでも気を抜いたら、発情した犬みたいに腰をはしたなく振り立ててしまいそうだった。

股間に植えつけられた肉根は淫魔の粘膜に摩擦されるにつれて痺れるような喜悦を孕む。ジンジンと疼き狂う牡銃は今にも暴発してしまいそうで、ファムはもう気が気でなかった。

「イきそう？　イきそうなのね……いいのよ好きなだけピュッピュして。ファムちゃんの

エナジーたっぷりのチンポミルク、お姉さんが一滴残らずごっくんしてあげるから」
「そーそー、ファムちゃんがイけばイっただけ、アタシたち美味しい思いができるんだモノ。我慢なんてやめましょうよォ？」
ペニスをしゃぶるサファイアの誘惑に、その間ファムの白桃にも似た臀部を撫で回し按摩していたルビーが追従する。
「う、ぐぅぅっ……そんなこと、させるもんかぁっ……」
(負けるもんか…こいつらにボクの力を吸い取らせたりなんかするもんかぁっ!!)
淫魔たちの誘惑が却って幸いした。反抗心を煽られたファムは再び下腹に力を込めて、決死の思いで肉の嬲りを堪えようとする。
「あらあら。サキュバスのやらし～いお口でおしゃぶりされてるのに、我慢だなんてできると思ってるの？　ホントお子ちゃまねぇ」
「だけどそうこなくっちゃ。足掻いてもがいて、それでも堕落していく人間ほど面白い見世物はないものねェ」
反抗心を取り戻した少女の姿に、しかし淫魔どもは実に嬉しそうに笑ってみせた。
「おっ、おまえたちぃ～っ……!!」
ここにきてファムにも先ほどの甘言が無駄な足掻きを長引かせるための挑発であったと気づかされたのだが、結局彼女にできるのはただただ淫魔どもの快楽責めに耐え忍ぶこと

以外になかった。
「ンふふ、可愛いオシリの穴だこと」
にわかにルビーがファムの桃割れをぐっと開いた。いちごミルク色をした放射状の窄まりが外気に触れ、肛門を射抜く視線に少女勇者はビクンと跳ねる。
「きゃっお尻ィッ⁉　みっ、見ちゃやだぁっ⁉」
排泄孔を覗かれている……圧倒的な恥辱に激しく暴れる処女勇者だったが、紅眼の淫魔はそんな少女の尻にとりつき、舐めるような視線でじっくりと可憐な桃孔を視姦する。
「あらあら、オシリの穴キュッて窄めちゃって。恥ずかしいのね……でも大丈夫？　これからもぉっと恥ずかしいことされちゃうのにィ」
ぬるろれろおぉぉっっ。
予言的な物言いとほとんど同時に、ねっとりとした刺激が桃粘膜を覆った。
（え、うそ…ボクのお尻の穴……舐めてるッ⁉）
「きゃあああああっ⁉　いやぁっ、やだぁぁぁっ‼　舐めないでっ、そんな汚いとこ舐めちゃやだあぁぁぁっっっ⁉」
事態を悟った瞬間、自分の鼓膜まで突き破りそうなほどの凄まじい絶叫が口を突く。
しかしそれでも銀髪の淫魔は嬉々としてファムの尻に顔を埋め、不浄の門を舐り続けた。
「ほらほらもっと頑張ってしっかり締めないと、お姉さんの舌がファムちゃんのオシリに

入っちゃうぞ～っ♪」
ぬぐっぬぐぬぐぅぅぅ……。
肛門で熱気が弾けた。淫魔の舌先が括約筋の防壁を突破したのだ。
肛門へと捻じ込まれた舌は尺取虫のように目まぐるしく蠢き、直腸内部を遡上してゆく。
「んあぅっ…うぐぅっ……おっ、お尻やぁっ……そんなとこぉっ、入ってくるなぁぁっ!!」
本来物が入るはずのない場所への挿入に、ファムが重苦しい恥声を上げる。しかし淫魔はかまわず、弾力のある舌を巧みに蠢かし見る間に直腸を制圧してしまう。
「んふふ、ファムちゃんの後ろの初めて食べちゃった♪　ああんアナタのお腹の中ってばプリプリしてて、とっても温かいのねぇ！」
「わぁお、オシリほじくられた途端オチンポもビンビンになったわぁっ♪　さてはファムちゃん、オシリが感じやすいのね？」
乙女の股間を前後から責め立てつつ、淫魔どもは少女勇者をこれでもかと侮辱する。
「違うぅっ…ボクはそんなの感じたりなんて……んふぁぅっ!?」
すかさず否定しようとした言葉が情けない悲鳴に取って代わる。直腸をえぐる肉舌がネジを巻くようにぐにゅりと螺旋を描いたのだ。
「あらあらうそばっかり。アナルキュンキュンさせて悦んでるくせに。それともこんなん

じゃ物足りなりないってこと？　ならもっともっとすごいのしてアゲル」
すかさずファムの抗弁を退けると、肛門を犯す淫魔は更に激しく舌を蠢かす。それまで掘り進むばかりだった舌使いは踊るような抜き差しへと変わり、微細な振動は腸管を蠕動させ鈍重な響きが女勇者の下腹部を刺激した。
「ふぁっ…ぐっ…んっふぁぅぅっっ……」
便意にも似た鈍い疼き。どうしようもないもどかしさに背中を押され、ファムはその腰をガクガクと前後に振り立て始めてしまう。
「やだぁこの娘また腰振り始めちゃった♪」
「ほらほら我慢しないで出しちゃいなさいよ、おチンポの先から真っ白なオシッコ。ちっちゃなときからオトコノコみたいに立ちションしてみたいー、って思ってたんでしょ？」
淫魔たちははやし立て、更に淫らな舌使いをエスカレートさせてゆく。
（だめぇっ舌、きもち…い、いぃぃ……）
ペニスへストローのようにチュウチュウと吸いつかれ、アナルを執拗にほじくられて。未知の快感に生娘であるファムがそう長く堪え続けられるわけもない。
肉筒の根元がにわかにじわりと熱を持ち、陰茎の中心を通る尿道にツンッと針で刺したような疼痛が突き抜ける。
なにか来る。本能が少女に限界を知らせた。

「ひゃぁんんっっ、だめっでるっ、なんかでるぅっ⁉　もうでっでちゃうううっっっ‼」
びゅぶぷぅぅっ‼　びゅくっびゅるっどびゅびゅびゅびゅぅぅぅぅ――――――ッッ‼
限界を悟るのとほとんど時を同じくして、偽茎を精が突き抜ける。精通の瞬間、それは文字通り陰茎が爆ぜたかと思うほどの衝撃だった。
快感そのものが尿道をくぐり抜けてゆくかのような凄まじい喜悦、二度三度と続くにつれ深まる陰茎の深い疼き。そのどれもがファムの理性を掻き乱し、牡快楽の虜にさせた。
「あっあっああ…あひぇぇぇ……‼」
腰骨がぐずぐずに蕩けるような心地よさ。高潮しきった頬を弛緩させ情けない呆け面を曝しながら、少女勇者は淫魔の口腔に向けてドクドクと白蜜を注ぎ込む。
「ごきゅっごきゅっごきゅっ……んん～っ濃厚っ♪　これなら何杯でもイけちゃうわ」
「ずるいわよサファイア、次はアタシの番ッ！」
それから二匹の淫魔に代わる代わる精液を搾り取られた。
レロレロ、あむあむ、ちゅぅっちゅぅぅっ‼
「やめひぇっ、おちんちんもぅ吸わにゃいれぇっ……んひっひぃぃぃっっ‼」
堪えようにも踏ん張りどころの菊座は絶えずもう一方の淫魔にほじくり返されている。柔らかな舌が直腸奥をぐりぐりと押し上げると、ファムの意志にかかわらず勝手に肉根が悲鳴を上げた。

「やだっお尻もぉ舌突っ込んでこないでぇっ!!　だめっまた、また……あああっっ!!」
ぶびゅ――――ッッ!!　びゅくっ、びゅるっ、どびゅぶぷぷぅぅぅっっっ!!
射精が数十回を数えると、放精のたび目の前が真っ白に霞む。それなのに……四肢が弛緩し口からは喘ぎしか漏れなくなってさえ、腰だけは浅ましい前後運動を続け次の射精へと加速を早めてしまう。
「あらぁ、ザーメンの出が悪くなってきたわよぉ？　ほぉらファムちゃんガンバ♪　かぷっ!!」
おどけ口調で言いながら、しかし淫魔は非情にもファムの過敏な桃色亀頭に歯を立てる。
「きゃひぃぃんっ⁉　んひゃあっかんじゃやっやぁぁっまたでるっでちゃぅぅぅっ!!」
どびゅるぶぱっ!!　びゅぷっ！　びゅるぶっ！　どびゅるびゅぷぅぅっっっ!!
射精絶頂の最中で敏感極まる牡性器へと加えられた口撃に、肉根は激しく跳ね飛びながら暴発しサファイアの口腔に命のエキスを撒き散らす。
「もうやだぁっ…えぐっ…おちんちん痛いっいたいのぉっ、もぉっゆるしてぇぇっ!!」
地獄のような悦楽に堪えかねて、無駄と知りながら懇願するも、
「射精しすぎて疲れてきちゃったのね、かわいそうに……でもだぁめ♪」
ちゅっちゅぱちゅぱじゅるるぅぅっ!!
想像通り、いや想像以上の非情さで悪魔たちはファムから命のエキスを搾り続けた。

「ひぎゃぁっ、いやなのにまたっまた出るぅぅぅっっっ!?」
びゅるっびゅくっびゅっびゅっびゅびゅびゅぅぅぅぅ!!
(なんでっ…なんでボク、おちんちん突き出すのやめらんないのぉっ…やなのにっ、もう射精したくないのに……ああっまたぁっ!?)
どびゅびるるっ!! びゅくびゅくびゅぷびゅびゅりゅぶぶぷぅぅぅ――――――ッッッ!!
「あはは、この娘泣きながら射精してるー♪ 辛いの? 出しても出してもキモチイイの歯止めがきかないんでしょ? そりゃアナタは女の子だもん。うそのオチンポでいくらイッたってだめよぉ」
「そうそう、おま○こでイクまで感じすぎちゃうの終わらないわよぉ? ま、その前に気持ちよすぎて狂い死にしちゃうでしょうけど♪」
「くるぅっ!? そっ、そんなのやだぁっ!!」
淫魔の言葉はとても冗談とは思えない。このまま延々と射精し続けたら、快感のあまり本当に発狂してしまうに違いない。
怯えきったファムの反応に、ペニスを咥え込んだルビーがニヤリと笑う。そして少女の弱みにつけ入るように、
「それなら大魔王様におねだりなさい。ここにいる男はあの方だけ、アナタを女にしてくれるわ」

不気味なまでの猫なで声で、紅眼の淫魔は悪魔の取引を持ちかけてくる。
「うっ…ううっ……だ、誰があんな…ヒヒジジイなんかにぃぃっ……!!」
確かに終わりの見えない快楽はとてつもなく辛い。とはいえ一時の安息を得るために、今まで護り通してきた貞操をよりにもよって憎き魔王に差し出すなんて――。
「まあっ、大魔王様を捕まえてヒヒジジイですって！　確かにナイスネーミング……ってうそうそ、アタシたちのマスターになんて暴言を！」
ファムの言葉に頷きかけつつも、魔王の視線を感じてすぐさま訂正するサファイア。
「大魔王様がヒヒジジイなら、アナタなんてさかりのついたメスザルじゃないの。ほぉら発情しすぎでおっきなオシリ真っ赤に染めちゃってさぁ」
パシィィンッッ!!
「きゃうんっ!?」
背後のサファイアに尻をぶたれ、思わず黄色い悲鳴が口を突く。火照りきった肢体は今や全身性器と言っていいぐらい敏感で、与えられるどんな刺激にも悦びを見出すまでになっていた。
「ほらほらオシリぶたれて感じちゃって！　おま○こからはウシさんの涎みたいに粘っこいマン汁はしたなく垂れ流して!!　こぉんなケダモノのくせして今更カマトトぶってんじゃないわよ!!」

バシンッ！　バシィッ!!

二度、三度と立て続けに桃尻が打ち据えられる。衝撃にペニスがぶるんと振り回され、それだけでまた先端から先走りがびゅるりと撒き散らされた。

「ほら言いなさいよ、おま○こしたいですーって。マンズリだけじゃ満足できないでしょ？」

くちゅくちゅと陰唇を捏ね回しながら淫魔が迫る。堪えなくちゃ、心ではそう思うのに。久方ぶりに与えられた牝の悦びはいともたやすく肉体を抱き込み、あれほど強固だった拒絶心までをも酸のように溶かしてしまう。

「ほら、どうなのよ？　おま○こいらないの？　おチンポ射精で狂い死ぬ？」

つぷぅっ。姫割れを嬲る淫魔の中指が軽く膣口をえぐる。結局それが最後の一押しだった。

「うはわぁっ!?　しっ、したいぃっ、したいですうぅっ!!　おっ、おお…ぉまっ……おま○こぉっ!!　ボクのおま○こに……その…おっ、おちんちんいれてくださいぃぃぃっっっ!!」

途中言葉に詰まりながらも淫魔の指妓に後押しされて、ファムはとうとうはしたない懇願を身も世もなく吼え立てた。

（う、ああ……言っちゃった……ボク、気持ちいいことして欲しさに……!!）

叫んでしまったそばからじゅわりと胸を焼く罪悪感。しかしそれは同時にどす黒い背徳

感となって、少女勇者の子宮をキュンキュンと疼かせた。
（でも、でもこれでやっとボク楽に――）
「断る」
ようやく切ない疼きから解放されると思った矢先、玉座から降り注いだのは信じがたい魔王の拒絶の言葉だった。
「え……な、なん…で……？」
安息と快楽のため、悪魔の取引に応じたのに。自尊心と共に汚れなきこの身まで差し出したのに。想定外の反応に、ファムはその場で凍りつく。
主の代わりに答えたのは碧眼の使い魔だ。
「バカねぇ、大魔王様のせっかくのお誘いを一旦無にしておきながら、今更簡単に抱いてもらえるだなんて思ってるの？」
「そうよそうよ。アンタなんてお妃どころか猿回しのメス猿……ううん、せいぜい家畜のメス豚がお似合いよォ。そんな豚風情が大魔王様のお相手だなんて笑わせるわ」
自分をそそのかした張本人であるはずのルビーまでもが同調し、少女を突き放すように蔑みの言葉を吐きかける。
「そ、そんなぁぁっ……してっ、してよぉぉ……エッチしてくんないとボクッ、もうあたまおかしくなっちゃうんだからぁぁっっ!!」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/